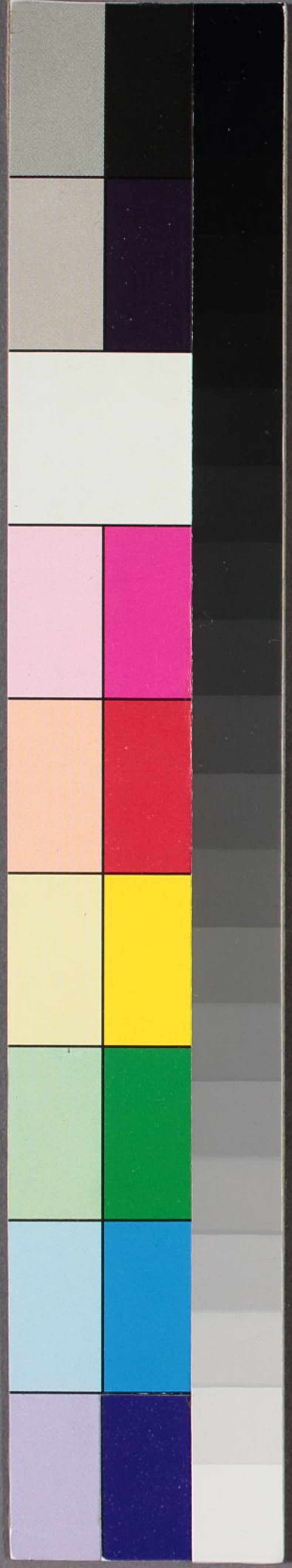


芭蕉句選年考

秋之中
第幾冊



芭蕉句選年考秋之中

芭蕉句選年考殊之中

栗釋名まのりーまのりー草紅菴

貞享五年戊辰七月廿日於竹葉軒長虹與乃栗釋名
とてしとあふんまのりーまのりー菴の中よりとある青林まのり
秋の雨ふり物よ出るまのりかけく荷兮と振身三何くとて外
一井越人胡及嵐薄六吟の音仙秋の日素とてとる○笈
日記尾港の郊ニ松カシマの舟葉物とてふ竹菴とてふのまのりとも
て七文字のまのりとも物しとも迂の海とてとる○海歌集よ
う迂の海とてとる○評林白洲扉清貧の腸之白氏文集林下
幽閑と氣味深と何とて世に榮耀はともとる一瓢の飲乃

乳一... 例の... 東... 西... 本...
乳一... 例の... 東... 西... 本...
乳一... 例の... 東... 西... 本...

名目... 葉の...

葉の... 葉の... 葉の...
葉の... 葉の... 葉の...

名目... 葉の...

葉の... 葉の...
葉の... 葉の...

元禄... 日... 湖... 山...
元禄... 日... 湖... 山...
元禄... 日... 湖... 山...

石山... 三...
石山... 三...

名目... 池の...

貞享... 貞享...
貞享... 貞享...

貞享... 貞享...
貞享... 貞享...

つら月を鑑のあつせしやまきしんはりに月をりて
と壯人そし判那のひまぬらんはねまふら古く
三ひやくふらむくさもいしきの昔定因名月を
つらもたぬあつせしやまきしんはりの鑑のあつせし
かきしんはり天然とあつせし祖徠譯文筆蹄日終夜ハ通霄ヨリ
曉ニ至ルヲフ歴史医書ナトニ誠ニ夜通ニ心ナリ文章詩歌
ノ上ニテハ切ニ思ヒツヨク夜ヲ更スヲ見セニ為ニ終夜ヲト云也ナ
初子時をあよきを奉りてさむむをねん人あつせしやまきしんはり
勺まじり月をりてあつせしやまきしんはりの鑑のあつせし
と候の

野々々々々

名目や生るるらつき教もね

錦 綿 緋 段
月 古 夜
孫 明 渡
銀 漢 無 声 露 晴 壅
玉 蟾 初 上 欲 回 時 晴
樽 素 琴 宜 先 嘗 月 陰
陰 晴 未 可 知

え原二平のあつせしやまきしんはりの鑑のあつせし
東月をりてあつせしやまきしんはりの鑑のあつせし
のあつせしやまきしんはりの鑑のあつせし
やまきしんはりの鑑のあつせし
抄に教をきき教家の大徳也

名目や生るるらつき教もね
え原二平のあつせしやまきしんはりの鑑のあつせし
と候の

奈のまきえ原二平
と候
初録を末志

七文字此中を二條よりあつて中の切といふ名をきり初めはかた
く後あつて續江の人の習ひとせん者後の人にも中傳へ傳ふき
○此舟之庫ももくくく○或り御傳へはくもを附あつて
舟をまわつてを後をまわす

本朝の渡りしとてあつてはるの月

貞享五年の月一いつよひのいつくさくは後くう國のふれはる
全に全一 ○秉燭談旨九月十三夜中秋下同く婁宿也ト云フ抄物吉備公
其所以ヲ不詳徒然也中秋ト同く婁宿也ト云フ抄物吉備公
ノ傳ナト云説有レ氏慥カナラス五雜組天文部九月十三晴釘靴
挂断繩ト云フアリ此日晴レハ夕シク晴ルト云フナリ先人大府清公

保延八十五代
崇徳院三年号寛平
八字多天皇号五十九
代

此月ノ會ニ詩ヲ乞フニヨリテ此夏ヲ用ユ然レ氏明ノ時田家雜石
ノ腊雨ニシルスノ諺語ニテサシテ明月ニアツカラヌ前年山本通春ト
云浪士アリ考彰館ヨリ寫シ來ル由ニテ中右記ノ内ニテ抄山ニシテ示
サル保延元年九月十三夜曰今夜雲淨月明是寛平法皇今夜明
月無双由被仰出仍我朝以九月十三夜為明月夜也此云ニテ
其始ノ明カナリサノミフカキ等理有ルニ非ス一時天子ノ教賞ヨリ
後來永ク例ト成シテ期トスルヘシ下畧 其終ニ云釘靴ト云ハ今京
師ニテ鄙人ノハクツナスキト云フ物ニテ天々凡ヨキニ因テ壁ニ挂テ置
クトナリ ○又東見記ニ九月十三夜歡月のみは延長の時とあり
とつて建仁寺の三益和為十三夜の詩の序を書之又北野天神
の縁起もも去年今夜侍清涼ト云々も流羅の多幸此九月十三夜

何れ由緒のありしき白くもそよみ付くし初きれ一候
しる不詳はの葉はすのそよみしる風の風情はれしる
坊のふしし一の住持も似くまはれししとやいし唯
いはしあはれ葉はすの月をらしはれししとやいし
ハ之は柳風とてふくく先程後の情智の従はれしと
はよしと成小文庫はとて初は累先々の坊ありしとれとあり
まはれしるもあし人のまはれしとていしとていし
夕解は空也らしは東山す住持しとていしとていし
しお遠し空也上人の圓融院天禄三年九月十二日寂東山西光寺八
十三歳又東下野守常録聞空也世以テ皆延喜帝御子之由ラ
申ス全ク御子ハ非ス延喜三年癸亥誕生天禄三年壬申七十歳ニテ

入滅也ト云々○或人石抄のそよみ小文庫と自伝そよみ葉よの
そよみそよみあらししとていしとていしとていし
そよみそよみ葉はすの月をらしはれししとていしとていし

悼遠流天宥法師

其玉成相違へうえせ法 の 月

何しの年のそよみそよみ○治承葉よおまはれしとていし○梅村
載筆曰徹書記ハ東福寺の僧正徹といふ人書執ハとていし
官はとていしとていしとていしとていしとていし
る或人屋風は格相と三日月とていしとていしとていし
せ風とていしとていしとていしとていしとていし

梅村載筆ハ林春
信述

葉のそよみハ

これより或人は家ハ天也... 流石せしむる... 魂の... け... 天子

四角の... 容の目

い... 同... 白... と... 故...

後... 元年トス

月... 妻乃...

元禄四年の... 妻... 今... 出...

又云ハ... 本... 今... と... の...

秋...

元禄七年九月廿... 後...

去りしは先づ此の山にありて秋も時を待たず
いふはふたにありしれん月の形もさびしき
二つに散らるる花ははらうまの秋の夜をうたふ
粟の穂はむらさき暮暮枯木の場をぬきやう
何もの及びんと各感一ちひぬとてうら
ふん人のこころをなほさるる秋の夜もさびし
美抄にさかぬ秋の夜ははらうまの秋の夜も
いふはふたにありしれん月の形もさびしき
いふはふたにありしれん月の形もさびしき

燿山

義仲の夜更の山々

元禄二年八月十四日義仲の國よりにありし
美抄にさかぬ秋の夜ははらうまの秋の夜も
清水松の白のちよは秋の夜ははらうまの秋
抄に極々場々湯屋の白の山々々々

畦止亭

自説や極々々々見の佐

元禄七年九月廿七日に後日就畦止亭今昔を九月
廿八日におもひえたる名をいふとて七種の草を
かきとる各々向ふりてを注是る其便りにお

注はるるの佐

きつとんと夜月夜物及...
三日月は糸を縷んとし...
あつた...
思ひは道やゆく人形...
西重遊力之道車庸...
次は畦止...
情を哀...
恋老女...
と晴くりにさん酒の神惟...
深窓...
の奥...
聴砧悲...
入月の...
え福...
い...
あ...
る...
新...
ま...
の...
下...

の奥 畦止 寄...
聴砧悲...
入月の...
え福...
い...
あ...
る...
新...
ま...
の...
下...

東順ハ
日蓮宗江戸二本榎上
行寺ニ墓右リ

其南より信玄三とは其
七月八月より其ま
看病にんまの七をえ
又榎の陰の高とほり
さぬ付のいおひか
さるのいおひ
何れにんまの子
其南
かゝりて高塚をさ
信にに

と其南より文とくう○風俗文述に在るは東順の傳も云
先人東順の榎成りし其祖文白の望田の農士竹氏と在に榎
氏と云ふもの晋子の母に在る物なりと云ふ事本に云
の秋の月とやの石枕の上よふかきくもきの信考と云れ然る
おのれうたれ榎のわきくもく神されま終より文科の自成り
みくく大乗妙典の書は隠るるありし時鑿然と云て恒の
産とくも其何某のさうり傳説を傳く谷実甌塵の徳少
れしれも世話と云ひくもその衣を被り杖を杖く業と
持て己に六十自れを免れ杖を杖ぬる十と歩あり其業の
まもみ車にこけりしり湖上よまれく東路を流るる伝はる
かれも六徳朝市に人ありしりしりしりしりしりしり○伝説

東順ははくしりきり信考と云はるきりしりしりしりしりしり

月一はる榎より成るる名

元禄三年の事ありしりしりしりしりしりしり○後見記
湖南の都に在る亭に會真の亭と云ふしりしりしりしりしり
り焼く亭と稱する亭しりしりしりしりしりしりしりしり
遊力亭と稱する亭しりしりしりしりしりしりしりしりしり
其亭よりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
者とも○白坪のりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
初今無かりのりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

尚白形状記に正
秀許六西堂の住
いをくしりしりしりしり

いふ後枚し〇梅屋のなつとては風流の

月のこゝろもも南かじれくつ利

これの年事ぬれは師の母のきりきり〜
えええ〇三夜の寝し〜
る〜年の屋もぬれと三四の寝〜
陽屋福山のふをさ〜
〇事〜
「る日〜
廿夜〜

潭北と其南門亭
伴比の者也

海に十四日お友者の〜
昔も幾夜のお〜
〇
あし〇潭北の大意〜
あ〜

ア〜

あ〜

あ〜

元福二年の事也後の諸事〜

杉林のふのふき自れをゆへ

之福をまの己き果の國禪の跡ををい自れえ之通り
る自れゆき千あり自れを車庸世のふ以上三句ハ後の名
自石山にゆきていふ事○葉はま粥をいとい甘子といふ
ふといひ自の名ゆといふ九月十三日教え福に年は國ハ自れを好の
名といふ事○國ハ自れを○句解にけりとも袖目記より石山に
といふ事○葉はま粥をいとい自十八日石山に信の時名自に
といふ事○葉はま粥をいとい自十八日石山に信の時名自に

善光寺

月愁や四門に空し唯むと川

自喜寺は月夜法より文神月を秋に記り後のも又いふ事
はのいふ事善光寺とあり○伽藍開基記曰信及善光寺者
本多善光所創也本朝第三主欽明帝十二年百濟國聖明王使使
者貢獻如來金像下畧○抄に四門ハ佛家ハ心齋心修行善
提温槃ハ四門ニヤ四宗ハ天台真言禪律ニヤ其の法相三論華嚴
等の宗名ありといふ近世天台真言は善光寺に兼ていふ事
名といふ事○都立舎ニ京都泉涌寺と官寺あり天
台真言禪律の四宗を兼ていふ事○信長は月夜に四門四
宗ありといふ事信長は月夜に四門四宗ありといふ事
も一ツの光りありといふ事親善ありといふ事又善光寺四門といふ事南

善光寺
本朝三代皇極帝元帝
創至元祿二年一千四十七
年四門西谷各自三藏
名有四門不同故三藏
教意立四門不同也一
有門明見有得道只
觀諸法實有用語也
二空門明見空得道三
亦有空門四非有非空

命山無量寺北空山雲上寺不捨山淨土寺定額山善光寺

女日阿まの月かまよえくらの根まひてふま
に馬上の轍をまきて数里いまの落宿あはれ杜牧

早しの鈴夢ふ敷の中山あまの寺ちまらぬ

まろく 揺く ぬま 月ま 一 茶れ 相

貞享元年の月を東をまき 信望れ里にむらしのあまの寺
鈴のまろく 其の寺に 志まれ日けらの中山のまよふ茶のまよれ
鈴のまろく 林にまをまき 茶のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく
まろく 〇 赤の馬のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく
茶のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく

柳まろく 〇 赤の馬のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく

牧カ早行詩垂鞭信馬行數里未雞鳴林下帶殘夢葉飛時忽驚
霜疑孤雁廻月曉遠山横僮僕休辭險何時世路平

よ 鈴まろく

石まろく 〇 赤の馬のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく

貞享元年の鐘のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく
鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく
鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく
鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく
鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく 鈴のまろく

草菴の巻

起あふる兼何のあつ水の縁

貞享四年此後(壺)栗○酒取業共は花さかへのあつ出つ

木因亭

かろまをく月とあえとに田三反

いづきの道くつはける後日祀大石の部三花ちとかくの如くそく
くろ○酒取業も田一○勺解の山をせと上田三反味魚ハ
斗小者引とに水の能く一体後少流くつと本因は平徳の
大極の位をあつて人あくとを成直のあつてくろ○栗の
貞享元年此(壺)し祀り大極もあつてとあは木因を成あ

と(壺)成直山(壺)時あつてくろ○成のあつてくろ○成のあつてくろ○
流(壺)の果と秋の葉とくろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○
谷加四休居士詩序曰大鑿孫君昉字景初去士大夫癸葉多不
受謝曰晞四休居士山谷問其說四休笑曰兼茶淡飯即休補破遮
寒煖昂休三平二滿遇即休不貪不妬老而休山谷曰此安樂法也夫少
欲者不伐之家也知足者極樂之國也四休家有畝園花木鬱々客
未嘗茗傳酒談上都貴遊人間可喜事或茗寒酒冷賓主皆忘
其居適予相望暇則步出徑相尋故作詩下畧 一休の名をくろ○
くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○
くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○くろ○
九葉といふ今に成直(壺)流くろ○木因は度再く度因

兼一の山崎の書とあるは、
元禄七年九月九日、
見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

林和靖梅詩七言律
對句前春ノ部ニ出ス
歸禽ノ向未知

大井川行幸和哥序

○我君の月代は月代
○兼一の山崎の書とあるは

ぬき紙をわきま
として用ひしれ
梅はくは母
川表の山の
りる北大井川
一

○兼一の山崎の書とあるは、
元禄七年九月九日、
見此元禄八年の九月、
一聯、
ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、
○仍ハ記ニ元禄七年の終、
○東ヲ集影畧互

兼一の山崎の書とあるは、

元禄七年九月九日、

見此元禄八年の九月、

一聯、

ハ言ハ律詩ハ中ニ二聯、

○仍ハ記ニ元禄七年の終、

○東ヲ集影畧互

芭蕉句送年考秋之中畢

